

仏典の  
星ぼし

文・渡邊愛子

絵・臂 美恵

東本願寺出版



★お釈迦さまの前生を描く物語については、巻末に、どの登場人物（動物もしくは植物）がお釈迦さまであるのかを記しています。物語を味わいながら、どこにお釈迦さまがおられるのか、ぜひ探してみてください。

世界にふれていただけることを願っています。

東本願寺出版

## 本書について

お釈迦さまが入滅された後まとめられた仏典（仏教典籍）は、膨大であり、お釈迦さまの教えや仏教徒の生活規範など、その内容は多岐にわたります。その中には、さまざまな人や動物の姿でお釈迦さまの前生の求道を描くお話（ジャータカ）や、どんな人にも教えが伝わるようやさしく説かれた喩え話など、子どもも大人も親しみながら、大切なことにふと気づかされる物語がたくさんあります。



もくじ

あとがき	お釈迦さまの前生	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
：	：	青年スメーダ	毒蛇のお布施	怨みを超えて	ブラフマダッタの布施	海を干しても	ミッタ比丘の病	世々生々の父母兄弟	疫病のくすり	五武器王子	見えない敵	おしゃべりなカメ	心の宝	葦のストロー	白象の徳	やさしいナンディヤ
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	
67	66	64	62	60	58	56	54	52	50	48	46	44	42	40	38	36

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
金の羽	嫉妬	信頼	親思いのサーマ	黄金の毒蛇	縁ありてこそ	欲ばりジャッカル	ガマ菩薩	世界一の塔	雪山童子	闇の中	キンスカの木	大きなシカ	サルの知恵	赤魚になった王様
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
34	32	30	28	26	24	22	20	18	16	14	12	10	8	6

本書について

3



I  
赤魚あかうおに  
なつた  
王様

出典  
『撰集百緣経』巻第四 第三話  
蓮華王、身を捨て赤魚と作るの縁

遠い昔のインドです。パドマカという、情け深い王様が治める国がありました。その国の人々は平和に暮らしていました。

ところがある時、急にたくさんの病人が出て、どの薬も効かず人々は苦しみのあまり王様に訴えました。命がけで薬を求めてやってきた病人たちに会った王様は、心を痛め、国中の医者による病気を治すよう命令しました。

すると、医者たちが答えました。「王様、私たちも同じ病やまいに苦しんでおり、患者を治すことができませぬ」

それでも医者たちは、この病気には赤魚あかうおが効くことを伝えると、王様は赤魚を城に届けるよう命令を出しました。すると、今度は人々が言い出した。

「王様、今までたくさんいた赤魚が、なぜか一匹も釣れないのです」

その間にも、次々に人々が病に倒れ、命を失っていきます。王様はその夜、一睡もしないで考えました。

翌朝、王様は王子と大臣たちを集めて言いました。「突然だが国を王子に譲る。これまで同様、国民を大切に国を治めるように」

驚かない者はなく、みな口々に、思いどまるよう王様に頼みました。「私たちの落ち度のせいでしたら、どうかおっ

しゃってください。どんなことでも必死に努力します。どうか王位を降りないでください。王様あつての私たちです」

王様は微笑ほほえみに浮かべて言いました。「嬉しく思う。だが、ここに来られない病人たちがたくさん苦しんでいるではないか。この人々を助けなくて、どうして王位にとどまれよう」

王様の決心が固いことを知って、誰も皆なすすべもなく、悲しい一夜を過ごしました。

翌朝、お香こうと花はなを携たずえた王様は、城の最も高いところに上り四方に深々と礼拝らいはいして心に誓いを結びました。

「私はこの身を捨て、赤魚となって生まれ変わり、その身を食べたものは、必ずや病気がいえることを！」

そのまま身を投げて絶命ぜつめいし、ただちに大きな赤魚になりました。

「アッ、赤魚だ。王様の赤魚だ！」「どうして王様をいただけよう…」「いただかなくては王様のお命が無駄になる…」

人々たまたごとは掌たなこを合わせて涙を流しながら、赤魚の身をいただきます。病気はすぐに治り、赤魚の削られた身は、不思議と翌日には元どおりになりました。

こうして十二年もの間生き続け、すべての病人を助けて、赤魚は生涯を閉じました。

遠い昔のインドです。今日は年に一度の大祭り。街のにぎわいがお城の庭にも響いてきます。庭番の男は、お祭りに行きたくてしかたがありません。

けれど、王様の大切なお庭の水やりを休むことはできません。ソワソワしている庭番の前を、サルの群れが通りかかりました。庭番の顔がパッと明るくなりました。サルのリーダーが賢いということを思い出したからです。

「ひとつ頼みがある。私は街へ行かねばならない。その間にこの苗床の苗にたっぷり水をやってほしいのだ。王様の大切な苗床だ。失敗は許されない。気をつけてやっておくれ」

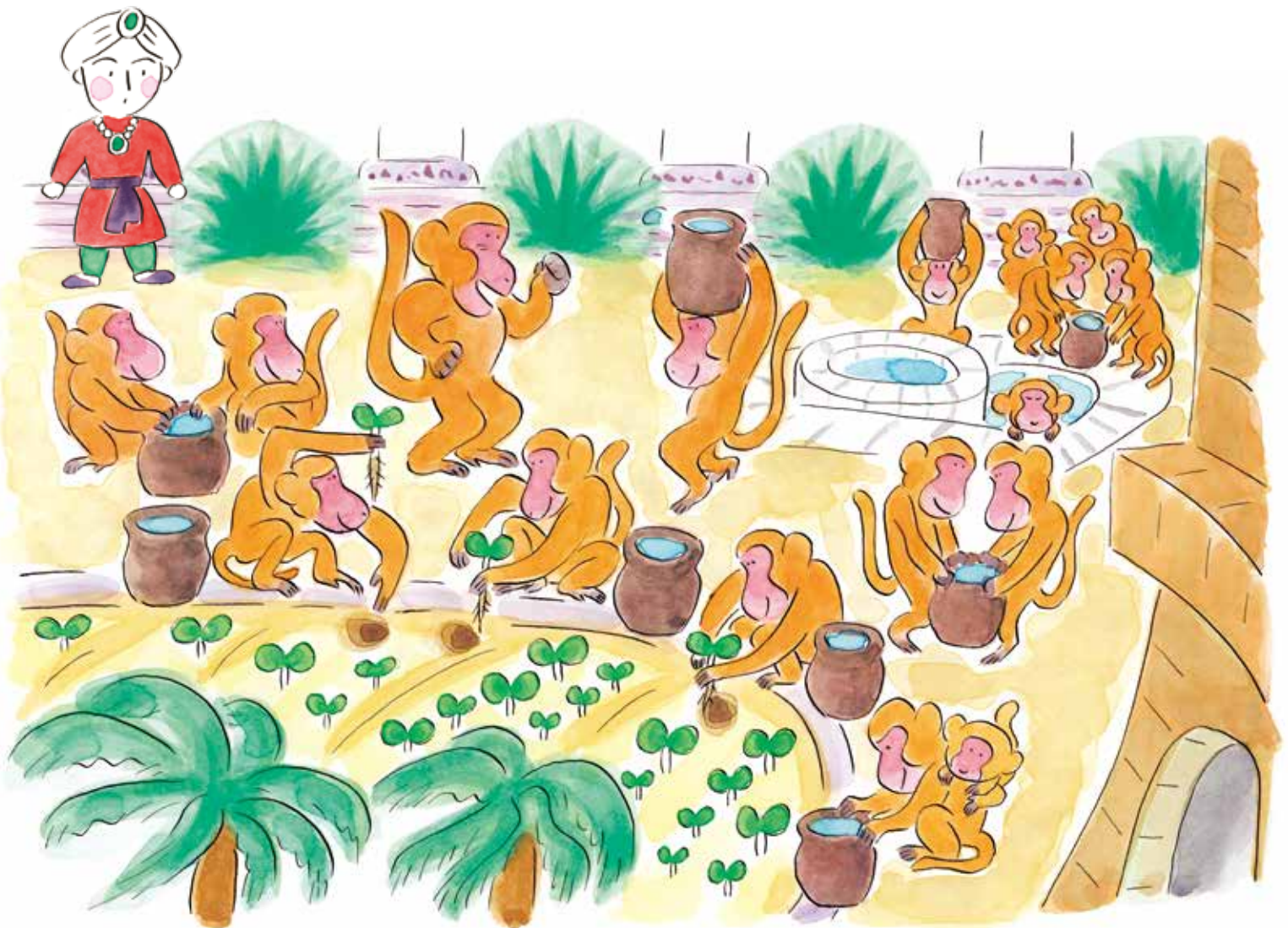
「はい。よくわかりました。お任せください」

サルのリーダーは自信たっぷりに答えました。サルたちは水をくんできて、苗床に水をまこうとしました。

「ちょっと待て。水を無駄にしてはいけないぞ。いいか、まず最初に苗をそっと抜いて長さと太さを見よ。そして丁寧に埋め戻してから根の分量に応じた水をやるのだ。いいな」

「さすがはわれらがリーダーさまだ。あの庭番は水の大切さなんて言わなかったな」

サルたちは、リーダーの知恵と配慮にすっかり感心しました。



出典  
ジャータカ 第四六話  
毀園本生物語

## 2 サルの知恵

細い根を傷つけないようにまわりの土を慎重にのけて、根の長さと太さをじっくりと目に刻みつけました。そしてまた前よりいっそう丁寧に埋め戻し、多すぎず足りないように水をやりました。

どのサルも真剣そのものでした。リーダーは一本一本をじっくりと見てまわりました。

「我ながら実に良いところに気がついたものだ。その上わたしの仲間皆なんと誠実に仕事をするのか。これで王様に少しでも恩返しができる。けっこうなことだ」

得意の絶頂にいたリーダーはふんぞり返って、もう少しで仰向けに転びそうでした。

そこへ王様のお客の賢者が、庭へ夕涼みにやってきました。

サルたちが苗を抜いては植え、抜いては植えをしているのを見ました。

「何をしているのかね」

と賢者は尋ねました。

「リーダーの言うとおり、苗に必要なだけの水をやっていくのです」

「ああ、なんと。一番大切な苗の命を傷つけていることに気がつかない」

翌日、庭番はすっかりしおれた苗を見て目をおおいました。